

アジア・太平洋研究センター主催，武漢史研究会共催講演会

日 時：2021年12月4日（土）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：武漢の名所を訪ねて——漢口旧租界・中山艦博物館——

報告者：青山 治世（亜細亜大学准教授）

趙 軍（千葉商科大学教授）

武漢は中国中部に位置する長江沿岸の大都市であり，武昌・漢陽・漢口の三地区からなる。武漢は古代より文化が栄え，三国時代に孫権によって築かれた夏口城の楼閣に由来する黄鶴楼は，唐の李白など多くの文人による漢詩の題材となった。また近現代においては，天津条約（1858年）による漢口の開港と日本など5カ国の租界設置，辛亥革命のきっかけとなる武昌起義の勃発，日中戦争中の武漢作戦，戦後の自動車産業中心の工業地域などで，日本でもよく知られている。近年では，新型コロナウイルスの関連で武漢が大きく取り上げられたことは記憶に新しい。

本年，趙軍氏は「武漢史研究会」を立ち上げ，有志者と研究の深化をはかろうとしている。本講演会では，青山治世氏が漢口旧租界について，趙軍氏が中山艦博物館と武昌市内の革命関連史跡についてそれぞれ講演し，その後，来場者との質疑応答を交えて総合討論を行った。

漢口旧租界とその現状

青山 治世

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が最初に拡大した街として世界的に“有名”になった中国中部の都市・武漢は，それ以前から最後の王朝・清を滅亡させた辛亥革命が勃発した地として，中国史のみならず世界史的にもつとに有名な都市であった。中国近代史を専門とする筆者がその武漢を初めて訪れたのは，この分野の研究を始めて20年以上たった2018年10月のことだった。その時訪れた武漢にある辛亥革命関係の二つの記念館・博物館（辛亥革命武昌起義紀念館・辛亥革命博物館）については，別の機会（武漢史研究会，2021年8月9日）にすでに報告しており，今回はその時訪れたもう一つの名所，漢口旧租界について報告した。

武漢の中心部は武昌・漢陽・漢口の三つの地区に分けられ，漢口は武漢を横切るように流れる中国一の大河・長江の北側に位置する港町である。清が英仏両国と戦った

第二次アヘン戦争（アロー戦争，1856～60）の途中に結ばれた天津条約（1858）によって，漢口は開港場に指定され，終戦後の1861年に正式に開港された。その後，19世紀後半にかけてイギリス，ロシア，フランス，ドイツ，日本の5カ国の租界（外国人居留地）が設けられた。

以下，現在も残る当時の建物を手がかりにイギリス租界，ロシア租界，日本租界について紹介し，旧租界の現在の状況についてもあわせて見ていきたい。なお，報告では筆者が撮影した現在の様子を写した写真とともに，主に馮天瑜・陳勇編著『国際視野下の大武漢影像（1838-1938）』（人民出版社，2017年）に掲載されている租界当時の写真もあわせて提示し，新旧の比較対照も行った。

旧イギリス租界には，イギリス系の滙豊銀行（香港上海銀行）漢口支店として1920年に完成した建物が現存している。1949年に中華人民共和国が成立すると滙豊銀行は撤退し，その後中国系の各種企業・組織が使用していたが，1998年からは中国光大銀行武漢支店として使われ，内部は創建当時の装飾が復元されている。

旧ロシア租界にも多くの租界時代の建物が現存している。旧ロシア租界の中でも租界時代の比較的立派な建物が残る一角は，「黎黃陂路街頭博物館」と称して街自体が博物館という体を取っていた。特に目を引くのが宋慶齡漢口旧居記念館で，もともと露清銀行漢口支店として建てられた建物である。

旧日本租界には，日本租界軍官宿舎や日本同仁会医院院長住宅，日本居留民団辦事処などが残っており，それぞれもともと何の建物であったかパネルが付けられているが，ひとつ租界時代のものと思われる洒落た建物を見つけたので，近づいてみたが，パネルの説明はなく，何の建物だったのか初めはわからなかった。しかし，外壁をよく見ると三菱のマークが付いていたので，三菱関係の建物だったようだが，確信は持てなかった。その後，1930年代に日本で作製された「武漢三鎮」という絵図を見ると，日本租界のこの建物があるあたりに「三菱住宅」と書かれていたので，やはり三菱関係の建物だったことは間違いのないようである。

また，旧日本租界の一角は「武漢天地特色旅遊街区」として整備され，カフェや服飾専門店のほか，日本のCoCo壺番屋などの飲食店も出店しており，明治尋常高等小学校校長公邸だった建物は香港式の飲茶レストランになっていた。ここも含めて，漢口の旧租界地区の中で租界時代の建物が比較的多く残るエリアは「漢口歴史文化風貌街区」に指定され，その一部は再開発の対象となっていた。

上記の旧日本租界エリアのようにすでに商業開発されていたところもあれば，接収されて住民が退去させられた後と思われるが，その後，住居や店舗などにも使われないうまま，急ごしらえの壁に囲われたままになっている租界時代の建物があちこちに見られた。そうした壁の一部には，「古くて危険な家から出て，綺麗で新しい家に移ろう」といったスローガンが書かれていた。それ以上調べてはいないが，市民の安全と

生活環境の向上を名目とした再開発の途中という感じを受けた（それによって利益を得る人がいるだろうが、そこまでは調査していない）。

以上、一日かけて散策した漢口の旧租界について、所感も交えて簡単に紹介したが、同地は近代における列強の中国進出の歴史と現在の中国社会の変化を、同時に体感できる場所といえるだろう。

中山艦博物館と武昌市内の革命関連史跡

趙 軍

武昌・漢陽・漢口の三鎮からなる「武漢」は中国内陸部最大の都市の一つであり、近代中国の製鉄業の発祥地であり、近代教育が最も発達している町の一つでもある。そのため、近現代中国の多くの歴史的事件や政治運動もここを舞台として繰り広げられたのである。

一、「中山艦博物館」から見る中国近代史と日中関係史

「永豊艦」は清朝政府が長崎の三菱造船所に発注した砲艦で、1912年完成後、清朝から政権を受け継いだ中華民国政府に引き渡され、中華民国海軍の一員となった。22年護法軍政府期間、孫文はこの軍艦に乗って革命運動を指導したことから、「永豊艦」はのちに「中山艦」（中山は孫文の号）に改名された。24年11月、孫文・宋慶齡夫婦はまたこの艦に乗って広州から香港に赴き最後の日本訪問へ旅立った。26年3月「中山艦事件」は第一次国共合作下の共産党弾圧事件として蒋介石と国民党右派が実権を掌握するきっかけとなった。日中戦争中の38年10月、武漢付近航行中の中山艦は日本海軍機の爆撃によって沈没され、数奇の服役歴を終えた。中華人民共和国の建国後、この歴史的「名艦」の持つ政治的意義が注目され、97年1月に引き上げられ、修復作業とともに、武漢市郊外の江夏区に観光公園付きの立派な「中山艦博物館」が建設され、2011年10月武漢で始まった「辛亥革命」100年記念行事の一環としてオープンした。

当博物館のメインの展示物は言うまでもなく、修復された中山艦である。見学者は前後左右及び斜め上方から艦を眺めることができ、爆撃を受けた舷下の穴もそのまま残されている。ほかには、引き上げた際に発見された300点前後の艦載設備・武器装備・乗組員たちの生活用品なども展示されている。面白いことに、筆者が見学した時、「孫文と梅屋庄吉を結んだ町：長崎——中山艦の故郷」という並行展示も開催されていた。「孫文」「梅屋庄吉」「長崎」「中山艦」といったキーワードをうまくミッ

スした内容構成であり、現地の見学者たちにとっては「教科書が教えない歴史」の一頁を知る好材料になると思われる。

二、国民革命の「聖地」だった武昌

1924年からの「国民革命」の拠点は、国民革命軍の「北伐」によって広東から徐々に北上した。26～27年前後は中国国民党と中国共産党の重要幹部らが武漢に集まり、政治・外交・教育活動などを積極的に展開した。昔の関連施設などはその後の戦争や政治運動（とりわけ「文化大革命」）によって破壊や解体・改築され、原形を保つものはごく一部だったが、近年、歴史的遺跡の保存・修復が各地方政府の「文化再開発」プロジェクトの一部になり、また中国国家旅遊局が主導した「紅色旅遊（レッドツーリズム）」すなわち中華人民共和国を成立させるために起こった革命に由来する地域を観光する旅行キャンペーンの展開により、武漢市内にある多くの歴史的史跡や遺跡が修復・再建された。今や市中に観光や散歩する際、時々これらの史跡と「遭遇」する場合も多くなった。武昌市内には「武漢農民運動講習所旧址」「毛沢東旧居記念館」「湖北省甲種商業学校」「中共五大開幕式旧址及び陳潭秋革命活動旧址記念館」など中国共産党組織と代表的人物の初期活動に関連する史跡が多く、しかもほとんどが数ブロックの市街地に集中しており、辛亥革命関連史跡群と並ぶ武昌市内のもう一つの歴史史跡群になっている。

これらの遺跡の再建に当たっては、近隣地区の買収と住民の移転なども伴い、むしろ昔より遙かに立派になったと考えられる。ある見学者は「毛沢東旧居記念館」を見学後に、「本当の旧居は小さいですが、隣の家も買われて、特別展示室に変わりました。実は大物たちがここに住んでいた時間は特に長くはないですが、住んでいた人が偉大なので、この家も輝いています」という感想文を書いて、素直な気持ちが伝わってくる。ちなみに、中国の博物館など社会教育施設は従来有料制を取っていたため、大体いつも「門可羅雀（訪れる人が少なくてひっそりとしているさま）」の閑散状態だったが、2008年から全国一律（一部の民間博物館や故宮博物院など超人気の施設を除く）に無料開放制度を取り入れてから、一般民衆は徐々に博物館に足を運ぶようになった。武漢のこれらの博物館と「紅色旅遊」施設も同様である。

なお、筆者の知っている限り、武漢市内だけでも発掘待ちあるいは再建待ちの歴史関連史跡がまだかなり散在しており、将来の修復・再建計画に期待したい。

（文責：宮原 佳昭）